

外国語教育メディア学会 (LET)

第45回 (2016年度) 九州・沖縄支部研究大会

## 研究発表要綱

2016年6月4日 (土)

北九州市立大学

# 《 プ ロ グ ラ ム 》

- 10 : 00 ~ 受付・登録 (1階 N113 教室前ロビー)
- 10 : 40 ~ 11 : 45 ワークショップ〈事前申込み制〉 (1階 N108)  
テ ー マ : iPad を利活用した協働学習の工夫  
—英語のリーディング力と学習意欲向上への効果—  
講 師 : 中村 純一 (佐賀市立大和中学校)
- 11 : 00 ~ 展 示 (1階)
- 11 : 50 ~ 12 : 20 支部評議員会 (1階 N113 教室)
- 12 : 30 ~ 12 : 50 開 会 式 (1階 N115 教室)  
総 合 司 会 : LET 九州・沖縄支部副支部長 荒木 瑞夫 (宮崎大学)  
開会の挨拶 : LET 九州・沖縄支部長 田口 純 (筑紫女学園大学)  
会場校挨拶 : 北九州市立大学学長 近藤 倫明  
挨 拶 : 外国語教育メディア学会名誉会長 木下 正義
- 12 : 50 ~ 14 : 00 講 演 (1階 N115 教室)  
司 会 : LET 九州・沖縄支部副支部長 長 加奈子 (福岡大学)  
演 題 : なぜ読めない、「読めたつもり」に終わるのか  
—英語リーディング研究からの示唆—  
講 師 : 卯城 祐司 (筑波大学)
- 14 : 00 ~ 14 : 20 支 部 総 会 (1階 N115 教室)
- 14 : 25 ~ 15 : 50 研究発表・実践報告  
第1室 (1階 N118 教室)  
司 会 : 林 裕子 (佐賀大学)  
司 会 : 竹野 茂 (宮崎公立大学)
- 14 : 25 ~ 14 : 50 日本の英語教育におけるデジタル教科書導入の可能性  
原 隆幸 (鹿児島大学)  
木下 正義 (元福岡国際大学)
- 14 : 55 ~ 15 : 20 Action Research into L2 Learners' Student Satisfaction  
Peter Carter (Kyushu Sangyo University)  
Etsuko Kakimoto (Kyushu Sangyo University)  
Kaori Miura (Kyushu Sangyo University)

- 15：25～15：50 小学生のICT活用に対する男女間の意識差と協働学習のあり方  
黒木 俊介（熊本大学大学院生）
- 14：25～15：50 **研究発表・実践報告**  
**第2室**（1階 N120教室）  
司 会：田上 優子（福岡女子大学）  
司 会：大津 敦史（福岡大学）
- 14：25～14：50 自律的学習習慣を目指したメール配信ソフトの利用  
鞍掛 哲治（鹿児島工業高等専門学校）
- 14：55～15：20 英語オンライン交流における相互行為と学習者言語  
荒木 瑞夫（宮崎大学）  
山本 佳代（宮崎大学）  
南部 みゆき（宮崎大学）  
横山 彰三（宮崎大学）
- 15：25～15：50 英文法学習段階におけるメタ言語知識との関連性  
岡田 美鈴（北九州工業高等専門学校）
- 16：00～17：40 **シンポジウム**（1階 N115教室）  
テーマ：中学・高校・大学におけるリーディング活動  
—主体的な学びを目指して—  
コーディネーター・パネリスト：  
大藪 修一（九州産業大学）  
パネリスト：田中 大三（福岡市立姪浜中学校）  
柿原 寿人（福岡県立山門高等学校）
- 17：45～17：50 **閉 会 式**（1階 N115教室）  
第46回支部研究大会 開催校挨拶 林 裕子（佐賀大学）
- 18：00～20：00 **情報交換会**（ぶどうの樹 野の食卓）  
司 会 大会実行委員 中野 秀子（九州共立大学）

## ■ ワークショップ〈事前申込制〉

▶ 10:40～11:45 (1階 N108)

### iPad を利活用した協働学習の工夫

— 英語のリーディング力と学習意欲向上への効果 —

講師：中村 純一（佐賀市立大和中学校）

英語の授業において、リーディング力が求められる場面では、語彙力や文法力のほか、読解力、理解力などが必要となるが、実際の授業においては、必ずしもクラスの生徒たち全員が同じ水準の英語力をもっているとは限らないこともあり、十分に理解できる生徒と、そうではない生徒の間では、とても大きな差が出てしまうことは既知のことである。会話練習や何らかのタスク活動であれば、他のクラスメイトとのコミュニケーションも生まれ、「分からない」「読めない」という不安も多少は緩和されるものであるが、一人でそうした不安を抱えたまま学習活動が進むことは、学習意欲の低下にもつながってしまう。

そこで、英語の授業において、リーディングが求められる場面においても、協働学習の手法を取り入れると同時に、ICT機器を利活用することにより、生徒たちのリーディング力の向上を支援したり、同じグループのクラスメイトと協力しながら、学ぼうとする意欲を高めたりすることにつなげるための工夫を紹介したいと考えている。

特に、今回は、タブレット型端末の中でも、Apple社のiPadを利用する。ラップトップタイプのコンピュータがタブレット型になったものがMicrosoft社のSurfaceと考えると、このiPadは、これまでのコンピュータとは一線を画する端末であり、豊富な教育用アプリの存在やその扱いやすさから、世界各国の多くの教育現場で利用されている。日本においても、全校生徒がiPadを所有して先進的な教育活動に利用されている学校もあれば、学校に数台しかない中で、様々な工夫を取り入れながら教育実践に取り組んでいる学校もある。私の場合は英語の授業をはじめとした教育活動に自由に使用するために、個人購入した6台を使用し、試行錯誤しているところである。

今回のワークショップでは、iPadを利活用した協働学習の場面を、実際にiPadを使用しながら体験することに加えて、英語の授業で使用することができる様々なアプリの紹介や、その利活用方法などを学んでいただく。一人一台のiPadがある場合や、数人で一台しかないという場合などを想定した内容である。なお、紹介を予定しているアプリは、リーディングを支援するためのものだけでなく、英語学習に利用可能な様々なアプリを紹介したいと考えている。

## ■ 講 演

▶ 12:50～14:00 (1階 N115教室)

司会：LET九州・沖縄支部副支部長 長 加奈子（福岡大学）

### なぜ読めない、「読めたつもり」に終わるのか

— 英語リーディング研究からの示唆 —

講師：卯城 祐司（筑波大学）

英文を読めたつもりを感じても、深い質問が出ると途端にわからなくなってしまうことがあります。また英文情報をより多く頭に入れることが、必ずしも理解につながるのとは何故でしょうか。こう考え出すと、「読む」という行為、そして「読めた」という状態がどのようなものなのかわからなくなります。英文を読むと、心の中にその読んだものの痕跡が残ると言われています。その変化は「心的表象」(mental representation)とよばれ、読解によって生成される心的表象には、(1) 表層的記憶／表層的言語表象 (surface memory)、(2) 命題的テキストベース (propositional textbase)、(3) 状況モデル (situational model) の3つのレベルがあるとされています。私たちが教室で行っているリーディング指導では、このどのレベルにあたる読解を行っているのでしょうか。

「読む」という行為は、必ずしも英文に明示的に書かれているものの理解にとどまりません。しかし、生徒たちに「推論」を促すと、内容理解を促進するものから英文が描いている状況から遠くかけ離れたものまで千差万別な「推論」が生まれます。教室現場で行っているコミュニケーション型リーディング指導は、果たして、この「推論」という伝家の宝刀を使いこなせるような読み手を生んでいるのでしょうか。

英語リーディング研究から振り返ると、教室で行われている指導には様々な疑問も湧いてきます。「和訳をさせると正確な読解力につながる?」「英語で授業を進めると読解は大雑把になる?」「大事な単語だけ拾って読みなさい」という昔ながらの指導は本当に良いアドバイス?」「長文読解力を妨げている指導が教室内であるとすれば?」「再話 (retelling) を行うと、何故、英文理解が高まる?」「ワークシートの罨とは?」「多読は本当に効果がある?」「クリティカル・リーディングとは、書き手や英文を批判する読み?」などなど。

リーディングに限らず、英語の授業全般についても「定説」は存在しないかもしれません。例えば、いつ本文についての音声を聞かせるべきなのかについて、正解はありません。また音読の時期は、生徒が内容を理解してから行うべきだと言われていますが、これも授業設計や目的によります。最初に音読させると、生徒の理解度を把握できるので、「いきなり音読」に意味のある場合もあるからです。

英語リーディング研究からの示唆を踏まえながらも、フロアのみなさんが教室でそれぞれ抱える問題を思い浮かべながら、ご一緒に考えたいと思います。

## ■ 研究発表・実践報告（第1室）

▶ 14：25～15：50（1階 N118教室）

司会：林 裕子（佐賀大学）

司会：竹野 茂（宮崎公立大学）

▶ 14：25～14：50

### 日本の英語教育におけるデジタル教科書導入の可能性

原 隆幸（鹿児島大学）

木下 正義（元福岡国際大学）

21世紀に入り、高度情報化社会やグローバル化社会に対応した教育の実現が求められている。その効果としては、学びの質の向上や教師の指導の質などが挙げられる。海外ではすでにICTを活用した教育の取り組みがなされており、日本でも世界の例を参考にしながら、全国的に導入するための研究が行われている。

本発表では、日本の英語教育におけるデジタル教科書導入の可能性を考えるにあたり、まず、日本におけるICT活用の取り組みを、時代背景や関連文書など、政策面から捉える。

文科省の2015年度の調査によれば、電子教科書の全国普及率は全国で佐賀県が86.1%で第1位であり、8.7%の北海道と大きな格差がある。佐賀県は古川前県知事時代から「先進的ICT利活用教育推進事業」を進めてきており、「ICT教育推進事業」に36億円の経費を導入したと聞く。県立高校生は8万円のタブレットの購入に5万円の自己負担があり、2割の生徒が県の借り入れ制度を利用している。

佐賀県教育庁の「ICT教育利活用推進事業」のこれまでの取り組みや佐賀県の公立学校におけるICTの利活用に関して、今年1月26日に佐賀県教育センターで佐賀県教育庁教育情報化担当指導主事の指山茂氏と佐賀県教育センター研修課の日吉敬子氏にインタビューを試みた内容などを踏まえながら概観する。

さらに、ICTを活用した教育実績のある佐賀県の公立学校の事例を考察する。今年2月17日に指山指導主事の紹介で第44回（2015年度）九州・沖縄支部研究大会（於：長崎大学、2015.6.13）のシンポジウムでパネリストとして発表された佐賀県立武雄高校の柴田邦博教諭のタブレットを使用した英語の授業参観をさせていただき、参観後に松本裕史校長、指山指導主事、柴田先生、私たちを含めた5名で約1時間に渡り、授業反省会及び意見交換会を行なった。

最後に、全国的にデジタル教科書を含むICT教育の導入を可能にする要因を導き出すと同時に、問題点や今後の課題を述べてみたい。

▶ 14 : 55 ~ 15 : 20

## **Action Research into L2 Learners' Student Satisfaction**

Carter Peter (Kyushu Sangyo University)

Kakimoto Etsuko (Kyushu Sangyo University)

Miura Kaori (Kyushu Sangyo University)

The years that students spend at university are never forgotten; the time spent and the education received have a massive impact on students' lives even after they graduate.

It is for this reason that many countries now require graduating students to complete national level questionnaires about how satisfied they are with their education.

Because of their bureaucratic origins, these surveys predominantly focus on Likert-type data, thereby suggesting that all majors provide directly comparable experiences and that students' satisfaction with 4 years of education can be expressed as a number.

A dramatically different picture emerges if we consider student satisfaction as a dynamic, variable construct which will alter as students grow and learn during their college days. The purpose of this presentation is to report findings from three years of action research into the meaning of satisfaction as it pertains to Japanese students learning English as a second language in a communicative program.

Results suggest that for these second language learners, satisfaction with their education is driven by both interactional and curricular concerns, is process-oriented, and is correlated with individual effort at content mastery.

## 小学生の ICT 活用に対する男女間の意識差と 協働学習のあり方

黒木 俊介 (熊本大学大学院生)

1. はじめに： 近年の小学校外国語活動では、ICTの活用が盛んになされている。しかし、ICTは日々変化しており、動機付的な要素に関する研究は少ない。この発表は、小学校外国語活動におけるICTの動機付けの影響を調査したKurogi (2016)をさらに発展させたものであり、ICTを活用した協働学習に対する男女間の意識差に焦点を当てたものである。

2. 手順： Kurogi (2016)では小学校5,6年生234名（男子116名、女子118名）に動機付けに関するアンケートを行った。アンケートはPassey et al. (2004)が行ったものをもとに、小学校児童向けに再作成したものを使用した。結果を男女間でグループ分けし分析した。回答は「1（いいえ）」、「2（どちらでもない）」、「3（はい）」の3段階であてはまるものを選ばせた。

3. 結果： 分析対象となった項目は①「友達と一緒にうまく学習することができるのでICTを用いた学習が好きだ」、②「ICTを用いて友達と一緒に学習するときのほうがよく理解できる」、③「ICTを用いるときに、やり方を友達に教えられることが楽しい」、④「ICTを用いることで友達と一緒に学習できる」の4つである。結果は①男子2.47、女子2.62、②男子2.27、女子2.46、③男子2.09、女子2.26、④男子2.55、女子2.63であり、女子のほうが協働学習に対する意欲が高く、意識・理解・関心が深まっていた。

4. 考察： 協働学習の際には、「1. 男女間でICTを用いた協働学習への意欲に差があることを意識する」、「2. 協働学習ではすべて児童に任せるのではなく1人1人に役割を与え責任感を持たせる」、「3. 役割はローテーションを組ませたり、役割交換を指せたりすることで、男女ともに意欲的に活動に参加できる」の3点が重要である。これらを意識した効果的な協働学習の可能性を提示したい。

### 参考文献

- Kurogi, S. (2016). A study of motivational effect of ICT on pupils in Foreign Language Activities in Elementary Schools. Unpublished graduation thesis submitted to Kumamoto University.
- Passey, D., Rogers, C. G., Machell, J. and McHugh, G. (2004). The motivational effect of ICT on pupils. Lancaster: Department of Educational Research, Lancaster University.

## ■ 研究発表・実践報告（第2室）

▶ 14：25～15：50（1階 N120教室）

司会：田上 優子（福岡女子大学）

司会：大津 敦史（福岡大学）

▶ 14：25～14：50

### 自律的学習習慣を目指したメール配信ソフトの利用

鞍掛 哲治（鹿児島工業高等専門学校）

近年、少子化や入試の多様化により、高等教育機関は全入学の時代に入り、様々な習熟度の学生が在籍している。また、学習習慣が必ずしも確立されていない学生も多数入学しており、各大学等ではその対策と支援が盛んに行われている。

このような事情を踏まえ、本発表では自律的・自発的な学習習慣形成の学生を育成することを目的として、愛知大学の龍昌治先生が開発された Moodle のモジュール「メール配信小テスト」の改良版を紹介し、学生の反応を紹介する。

当モジュールは、Moodle 標準の「小テスト」で作成した問題バンクとの共有、解答結果の評定への追加機能がある。また、問題はメールにて配信され、そのメールに記載された URL をクリックすることでログイン等の煩雑な操作は必要なく、解答もすぐに送信できる。

主な改良点は以下の通りである。改良前は従来の携帯用で、改良後はスマートフォン／タブレット用の仕様に変更し、問題形式・数等の多様化を心掛けた。

表 1  
メール配信ソフト

	改良前	改良後
問題形式	○×、多肢選択	○×、多肢選択 記述
配信数／1日	1通	無制限
解答期限 配信後	12時間～72時間	数秒後～無制限
受験結果 CSV ダウンロード	不可	可
Moodle 対応	V 2.4	V 3.0

最後に、学生の反応は概ね良好で、1クラス43人を対象としたアンケートを実施したところ、17名の学生から回答が寄せられ、「とても良い」と「良い」が約80%を占め、否定的なものはなかった。今後は、問題形式や数等も考慮に入れ、学生の学習習慣形成のためのメール配信方法・形態の在り方について長期的に調査・研究ができればと考える。

#### 参考文献

龍昌治 (2010). 「LMS を活用した授業実践 —Moodle 利用法マニュアル (3) — 出欠と課題管理編」『愛知大学情報メディアセンター紀要』20 No.1, 40-51.

## 英語オンライン交流における相互行為と学習者言語

荒木 瑞夫 (宮崎大学)

山本 佳代 (宮崎大学)

南部みゆき (宮崎大学)

横山 彰三 (宮崎大学)

「英語オンライン交流」は、目的、コミュニケーション形態、参加者の言語的背景等により、様々な実践を包摂しうる。また研究の対象となるのは比較的少人数の交流が多い。O'Dowd (2011) は、相手の状況で左右される不安定性や評価の方法論が定まっていないため、依然としてカリキュラムの周辺的な位置づけに留まっていると指摘している。しかし、多人数で行う長期的で安定した実践も可能である。しかしO'Dowd の言うように、多人数の学習過程を把握し、評価の基礎データを提供している研究は少ない。

本研究は、10年続く Moodle を用いた非同期的な看護大学生の英語オンライン交流の2015年度の実践をもとに、比較的多人数（全て英語の第二言語学習者、6か国から280人中、日本人学生61人）の交流での参加者の相互行為と学習過程をとらえ、その傾向の把握の上に、実践でのよりよい学習支援に向けて示唆を検討する。

実践は2015年度10月～1月の4か月間行い、全て看護学生である280名が身近な話題から看護に関する話題まで、テーマを持った6つのフォーラム（掲示板）で順次、投稿することにより交流を行った。本研究では全5,868投稿のうち、日本人参加者61名の1,493投稿のみを用いた。

また実践と並行し、日本人参加者に事前（10月）と事後（1月）にE-mailを書く英作文をしてもらい、語数と正確さ、流暢さ、複雑さを測定した。また並行して行った、動機づけに関する分析結果（荒木他、2016）も合わせて参照し、多変数間の相関を検討した。

全体の傾向として、学習者言語の流暢さと複雑さが上昇し、正確さは残念ながら伸びが見られなかった。変数間の関係では、投稿数と「不安」の軽減、及び学習者言語の複雑さの増大と「海外の動向に対する意識」の増大の間に弱い相関がみられた。これらを基に、交流でのやり取りと言語面の指導・支援が、内容的な理解や動機面の支援につながり得ること、その他について議論する。

### 引用文献

荒木瑞夫・山本佳代・横山彰三・南部みゆき. (2016). 英語クラスのオンライン国際化プロジェクト. 『第22回 大学教育研究フォーラム発表論文集』. 274-275.

<http://www.higheedu.kyoto-u.ac.jp/forum/kanri/forum/pdf/20160324213938.pdf>

O'Dowd, R. (2011). Online foreign language interaction: Moving from the periphery to the core of foreign language education? *Language Teaching*, 44(3), 368–380.

## 英文法学習段階におけるメタ言語知識との関連性

岡田 美鈴（北九州工業高等専門学校）

本研究は、明示的及び自動化した明示的文法知識とメタ言語知識の相関性について、標準英文法テストとメタ言語知識テストを用いて行った調査の結果を報告するものである。日本人英語学習者の多くは、教室において外国語として英語を学ぶことが多く、日常生活において英語による実践的なコミュニケーションに接触する機会は第二言語環境に比べ少ないといえる。また、日本における英語学習では、メタ言語を用いて文法を体系的に指導及び学習することが多いため、日本人英語学習者の持つ文法知識はメタ言語知識との相関性が予想される。その課題を立証するため、2013年から2016年にかけて行った3つの調査から、参加者及び調査方法ごとに、内在化が進んでいる文法項目とそうではない文法項目について詳しく見ていく。その上で、文法知識とメタ言語知識の相関性や、文法項目の内在度における両知識の相関性を明らかにしていく。調査で使用したテストは、大場（2008）が開発した「標準英文法テスト第7f版」とR. Ellis et al. (2009)で使用された「メタ言語知識テスト」である。1回目の調査は、九州の国立大学において行われ、工学部と経済学部の2年生66人が参加した。全体の結果から両テスト間に相関がみられた（ $r=.455, p=.000$ ）。2回目の調査では、同国立大学における大学生、大学院生、研究員、職員と高校生1名を含む40人が調査に参加した。内在度調査を目的としたコンピューターによる標準英文法テストとペーパーテストによるメタ言語知識テストを行った結果、低い相関がみられた（ $r=.282, r=.000$ ）。さらに3回目の調査では、本校における3, 4年生169人が参加し、ペーパーテストで行ったところ、やはり相関がみられた（ $r=.498, p=.000$ ）。これらの結果から、文法知識とメタ言語知識には何らかの関連性があることが分かるが、単位数の違いやスコアによる上位群及び下位群における相違、文法項目の内在度による相違など、様々な側面から分析したところ、その関連性に違いがあることが判明した。

## ■ シンポジウム

▶ 16:00～17:40 (1階 N115教室)

### 中学・高校・大学におけるリーディング活動

— 主体的な学びを目指して —

コーディネータ・パネリスト：大藪 修一（九州産業大学）

パネリスト：田中 大三（福岡市立姪浜中学校）

パネリスト：柿原 寿人（福岡県立山門高等学校）

外国語学習におけるリーディング活動は、語彙や文法知識を拡張させるだけでなく、クリティカルに考えたり他者と話しあったりすることを通して、思考力の涵養や、理解から発信までの言語活動の促進、チームワークの育成といったさまざまな要素を支えるものでなければなりません。その反面、リーディングの授業の現場は理想通りにはいかず、個々の教員が抱えている、あるいは感じている問題があります。また、世界的に見ても、日本人の英語リーディング能力は高いとは胸をはって言えるレベルではないのが現状です。

そこで、このシンポジウムでは、中学校、高等学校、および大学の現場で実際にリーディング指導に従事されている先生方にパネリストとして登壇いただきます。そして、それぞれの現場から、リーディングについて普段の取り組み状況はもちろんのこと、直面されてきた問題点や困難な状況をどのように乗り越えてきたかについて紹介していただきます。中学校から田中大三先生（福岡市立姪浜中学校）、高等学校から柿原寿人先生（福岡県立山門高等学校）、そして大学からは大藪（九州産業大学）がきれいごとではなく、実際に抱えている問題なども発表し、具体的な問題点を共有した上で、参加者のみなさんと議論を深め、主体的な学びとは何かをもう一度考える機会となるように期待しています。

## 中学校におけるリーディング指導

### － 現状・課題と改善の方向性 －

田中 大三 (福岡市立姪浜中学校)

これからの時代は、外国語を用いて交わす国際的なコミュニケーションにおいて、自分で考え、判断し、行動する主体性や論理力が求められる。そう考えたときに、中学校におけるリーディング活動では、現学習指導要領(文部科学省2008)にある「話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりすることができるよう、書かれた内容や考えなどをとらえること」ができる力を育成する必要がある。しかしながら、現在の中学校では、いまだに文法訳読に偏り、文法や語彙の知識のみを重視するあまり、英文を読み取る力がつきにくい状況がある。自分で考え、判断し、行動することにつながる主体的に英文を読み取る活動を実施するまでには至っていないということである。

文法訳読に偏る授業に陥っている原因として、教師がリーディング活動を通して、生徒にどのような力をつけようとしているのか意識していないことがあげられる。また、教科書の内容を網羅することで精一杯で、主体的なリーディング活動を実施できていないことが考えられる。

これらの問題点を解決するための方策として、以下のことが考えられる。

- リーディング活動を通して、育成すべき力を意識させるために、CAN-DO リストを作成、活用する。  
そうすることで、教師・生徒ともに目指すべき力のイメージを共有し、目標に至るための方策を模索することができる。
- 教科書の物語の要約を聞いてからリーディング活動を行ったり、読んだ英文の内容について英問英答を行ったりするなど、「聞く」、「話す」、「書く」活動と結びつけながら理解を促す指導を工夫することで、英文を読み取る力の向上を図る。
- 生徒の興味・関心を高める教科書本文提示の方法を工夫するとともに、内容について意見や感想を求める機会を設ける。
- 教科書以外に英字新聞の要約やALT作成の学校新聞等を定期的に読ませることで主体的なリーディング活動ができるようになるきっかけを作る。

## 英語学習意欲が低い生徒に対するリーディング指導

### — 予習を課さない Small Learning Activities を通して —

柿原 寿人 (福岡県立山門高等学校)

平成23年に「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」が公表された年の1年生から取り組んできた、意欲的・主体的に英語力を身につけようとする態度の育成について紹介する。その実践のきっかけには「5つの提言」の公示もあるが、それまでの訳読中心の授業からの脱却を目指したいという動機が強かった。本校の生徒の英語力は高くなく、入学段階で英語検定準2級以上を取得している生徒はおらず、3級にしても10パーセントを満たさない程度の取得率であり、学ぶ意欲についても毎年ほぼ6割の生徒が英語を苦手としている現状があった。それ以前の授業でも様々な音読活動やスピーチなどを行ってはいたものの、その生徒の英語力ゆえに、日本語における逐語訳を予習に課するというスタイルからは離れられなかった。生徒が予習した訳の確認を何らかの形で授業に入れており、訳を発表している生徒以外は、下を向いたまま受け身の沈黙姿勢を続ける生徒の姿があり、主体的に英語を学ぼうとする姿には程遠い現状があった。

そこで、スモールステップを踏みながら初見の英文を理解し、インプットの過程でプチ成功体験を重ね、意欲的に学習に取り組めるためのワークシートの作成とその指導法にたどり着いた。さらに理解した英文を再構築したり、関連するテーマについてスピーチや英作文をしたりするというアウトプット活動も、クリティカルに英文を読ませるために、できるだけ单元ごとに取り組ませるようにした。予習を行わず、最初の授業で英文に初めて出会うことで、新鮮な気持ちで英文の理解に努めることができ、各学習活動を短時間で進め、多くの活動を行うことで、**slow learners**も意欲的に授業に参加することができる。

ipadなどのICT機器も、スムーズな授業展開や生徒の学習意欲を高めるために必要なツールである。利用できるICT機器やアプリの紹介なども報告の中でできればと考えている。

## 大学におけるリーディング活動

### — 主体的な学びを目指して —

大藪 修一 (九州産業大学)

最近、主体的な学びとなるような英語リーディング指導が、中学校や高等学校、さらには大学の一般英語科目においても重視され始めている。これにより、4技能統合を前提としたアウトプット活動を取り入れる授業も盛んに実施されている (伊東, 2008)。発表者の勤務校では、一般英語科目に関して、語学教育研究センターを中心にグローバル・イングリッシュプログラムが実施され、全学の学部の枠を超えた学部横断型少人数英語能力別クラス編成により、4技能に重点を置いた実践的な英語能力の向上を目指している。

本プログラムの中で私自身は、主に英語リーディング授業科目を担当し、試行錯誤を繰り返しながら、リーディング指導を行ってきた。特に、内容理解はもちろんのこと、学生が主体的な学びとなるように、4技能統合を意識した指導を組み込むことで、単調な訳読方式からの転換も図ってきた。具体的には、授業では、私自身が英文全ての訳をしない、学生にもさせないことや、英文を意味のまとまりごとに区切って読み進めていくチャンク (フレーズ)・リーディングと内容を理解しながら声に出して読む音読の統合させたチャンク (フレーズ) 音読を積極取り入れるなどである。

ただこれらの方法が本当に学生にとって効果があるものなのか不安にかられながらの授業であったのは事実である。数年前に、ある学会での発表を機に、これらのチャンク (フレーズ) 音読が、年間を通じて指導した学生 (英語が中位レベルのクラスと上位レベルのクラス) の読解にどのような影響を与えるのかを調査した。事前テストと事後テストのスコアを調べた結果、チャンク (フレーズ) 音読は、英語が中級レベルの学生の読解に良い影響を与える可能性があることが分かったが上級レベルの学生には特に影響は見られなかった (大藪, 2014)。

本発表では、これまでの一連の成果や問題点を具体的に紹介し、今後の大学におけるリーディング指導について情報を共有していきたいと考えている。

## お知らせ・お願い

### 【資料代】

LET 会員：無料 / 当日会員：1,000 円 / 当日会員（学生）：500 円

### 【情報交換会】

参加費（会員・非会員とも）：5,000 円（学生半額） 参加を希望される方は、5 月 27 日（金）までに、支部ホームページからお申し込みください。

### 【大会受付】

午前 10：00 より 1 階 N113 教室前のロビーで行います。LET 九州・沖縄支部への入会を希望される方は受付へ申し出てください。（個人会員・団体会員 6,000 円，学生会員 3,000 円）

### 【ワークショップ】

ワークショップは事前申込制です。定員になり次第締め切らせていただきますので、参加を希望される方は、お早めに事務局まで支部ホームページからお申し込みください。

### 【事務局問合せ先】

〒 818-0192 太宰府市石坂 2 丁目 12 - 1 筑紫女学園大学 松崎 徹 研究室内  
TEL & FAX: 092-925-9279 Email: toru72@chikushi-u.ac.jp  
支部ホームページ URL: <http://www.j-let-ko.org/>

### 【昼食】

昼食は、学内の食堂、お近くのレストランやコンビニをご利用ください。飲食される場合は、N108 教室をご利用下さい。

## 開催校へのアクセス

### ■電車ご利用の場合

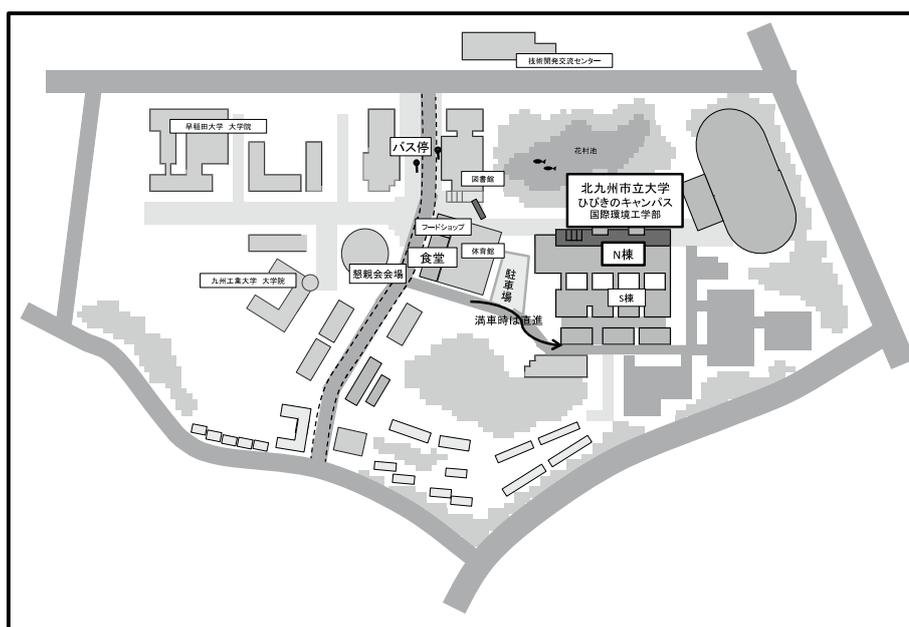
博多駅より、鹿児島本線で折尾駅  
宮崎方面より日豊本線で折尾駅  
広島方面より山陽本線・山陽新幹線で小倉駅乗換え、鹿児島本線で折尾駅

折尾駅下車 → 北九州市  
営バス折尾駅西口バス停より約 20 分 学  
研都市ひびきの下車  
→ 徒歩約 1 分

### ■タクシーご利用の場合

折尾駅東口乗り場  
所要時間 約 10 分

### 【大会会場】



公立大学法人  
北九州市立大学  
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU

## 第45回 支部研究大会実行委員長

植 田 正 暢 (北九州市立大学)

## 第45回 支部研究大会実行委員

柏 木 哲 也 (北九州市立大学)

長 加奈子 (福岡大学)

筒 井 英一郎 (北九州市立大学)

富 永 美 喜 (北九州市立大学非常勤)

中 野 秀 子 (九州共立大学)

---

2016年6月1日 発行

編集・発行 外国語教育メディア学会 (LET) 九州・沖縄支部

代 表 者 田 口 純

発 行 所 外国語教育メディア学会 (LET)  
九州・沖縄支部事務局  
〒818-0192 太宰府市石坂2丁目12-1  
筑紫女学園大学 松崎 徹 研究室内  
TEL : 092-925-9279  
FAX : 092-925-9279  
E-mail : toru72@chikushi-u.ac.jp

印 刷 平和タイプ・プリント社

---

